中国医学の三十五年

李　経　緯

この講演において中国が昔からの医史を重視するという伝統を重んじて、主として最近の三十五年間の医学史研究の発達状態と動態について簡略に述べて見る。

1、学会、研究会と学術雑誌について

中華医史学会は一九三五年に誕生して、以来一時的に中断したことがあるが、一九七九年に復活した。学術交流が以前より活発で、現在十個の省と市が分会を作っている。それ以外に、張仲景、馬王堆医書、孫思邈、李時珍、華佗、扁鵲、陳修圓などの研究会も次々に創立されて、各々の特徴に合致した学術交流活動を行っている。中国薬史学会も一九八三年に創立された。医・薬学史の全国的、地域的学会は年に約五～七回開かれている。「中華医史雑誌」は一九八〇年に復刊し季刊となっている。発刊部数もだんだん増加している。全国の漢方、西医及び科学史の雑誌にも医学史の欄がある。一九八三年に発表された論文は五〇〇篇で、国際的交流にも進歩が見られている。

2、医学史研究の組織と研究について

一九五一年に中国は中央衛生研究院（中国医学科学院、中医研究院の前身）に第一番目の歴史研究室が設けられた。一九八

二年には、中国医史文献研究所に、衛生部（日本の厚生省にあたる）によって認定された、医学通史、少数民族医史と東洋比較医史、基礎文献、臨床文献という四つの研究室があり、中国医史博物館（準備中）と中華医史雑誌編集室と図書資料室もある。上海、陝西、辽宁にも医史文献研究室をもっている。研究において専門の研究者以外にアマチュアの研究者もたくさんいる。医史学会は現在は各自意見を述べ、お互いに交流し、ときに論争もおきるというような自由な雰囲気になっている。この二～三年間だけでも個人の伝記あるいは医学部分についての業績などの本が十数冊も出版された。「中華医史雑誌」で発表した論文も量的、質的によくなってきた。たとえば医学起源の研究が巫術、宗教と医学発達との関係の研究を促進したとか、各流派の医学思想の研究が哲学と医学の発達との関係の研究を促進するとか、医学史の各時代区分の研究が政治経済制度と医学発達との関係の研究や、医学史上の人物の研究が、その時代や後世にどのような影響をしたかという歴史作用研究に役立つことなどがあげられよう。医学史研究は主として人物の生涯や医学上の業績、文献などの研究が占めているが、同時に大冊の文献「中国医学百科全書・医学史」、「中医大辞典・医史文献」、「中医人物辞典」、「中医文献辞典」を編集し、大冊の分巻本「中国医学通史」を編集準備しているという喜ばしい状態になった。

3、医史教育と大学院生の養成について

中国の医学院で医学史講義を開講したのはわりに早かったが、必修科目としてはこの三十年の間にできたものである。一九五六年に創立した中医学院は現在二十四ヶ所ある。普通の医学院の中で医学史の科目は一九四六年に初めて設けられたが、その十分の一の学校では講座時間は少ないままである。現在中国の医学教育は医史教育を重視するようになっている。そのために一九五六年と一九八四年に教師研修班を作った。衛生部が北京の中国医史文献研究所を全国医薬学院の医学史教師の養成の場として指定した。一九七八年に、第一回目の修士課程の大学院生を迎えた。現在全国十ヶ所の大学に医学史の大学院生がいる。一九八四年までに修士学位を得た人は約五十人、研究中の人は五十人位である。

4、博物館と記念館

一九三八年に医史博物館ができ、いまは上海中医学院医史博物館となっている。その後に設けられたのは陝西中医学院と中国医史文献研究所の博物館である。それぞれ豊富な陳列物が置かれているが、上海が最上である。それ以外に扁鵲、張仲景、華佗、孫思邈、李時珍、藍茂、陳修圓の記念館も地方にできている。また関係のある文物資料を収集し、学術交流し、また名医の名に因んだ漢方病院もできてきている。

5、医学史研究の傾向

三十五年の間に、中国の医学史研究は決して順調ではなかったが、しかし大きな業績をあげたと考えられる。例えば古代医学の業績、考古発掘と理論研究などがあげられる。これからの研究は以下に述べるいくつかの方向へ向うと思われる。

(一) 古代科学技術業績の研究を主にしてきたいまの研究は、社会学的な諸因子と医学発達との関係の研究に変わるだろう。

(二) 古代の研究と平行して近代、現代の研究をも重視して行く傾向がある。

(三) 中国の少数民族の伝統的な医学史、例えばチベット族医学史、モンゴル族医学史、ウイグル族医学史などは、増えつつある医学者、医史学者に重視されるようになっていく。

(四) 世界医学史の研究は以前より進歩してきたが、とくに東と西の比較医史の研究も中国医史学会に入ってきた。

(五) 外国の科学史家、医史学者、あるいは各学術団体と国際組織などと幅広く接触し、コミュニケーションをしようとしている。

(中医研究院中国医史文献研究所所長)

中国医史学卅五年（摘要）

李经纬

该文简要回顾了中国历来重视医史的传统。继则重点分述三十五年来医史之发展状况和动态。

一、学会、研究会与学术期刊：中华医史学会诞生于一九三五年、一九七九年复会后、学术交流较前活跃、现已有一〇个省市建立医史分会、此外、还建有张仲景、马王堆医书、孙思邈、李时珍、华佗、扁鹊、陈修园等研究会、各自开展着富有地方特色的学术交流活动。中国药史学会也于一九八三年正式成立。医药学史之全国性或区域性学术会议每年约有五～七次之多。《中华医史杂志》一九八〇年复刊后、仍为季刊、印数逐期增多、全国中、西医及科学史期刊多有医史文献专栏。一九八三年之论文刊出达五〇〇多篇。同国际间之学术交流也有所发展。

二、医史研究机构与学术研究：中国于一九五一年在中央卫生研究院（中国医学科学院、中医研究院之前身）建立了中国第一个医史研究室。一九八二年经卫生部批准升格为中国医史文献研究所、现设有医学通史、少数民族医史与东西方比较医史、基础文献、临床文献等四个研究室。还有中国医史博物馆(筹)、中华医史杂志编辑室及图书资料室。上海、陕西、辽宁也建有医史文献研究所(室)。在学术研究方面、除专业工作者外、尚有数倍之医史业余研究者。医史界已逐步形成了自由讨论和争鸣的良好风尚、学术思想活跃。仅近几年出版的个人通史和专科史著作约有十种、《中华医史杂志》等刊出之有关论文不但数量增加、质量也不断提高。如医学起源的讨论导致对巫术宗教与医学发展关系之研究、医家学术思想之讨论引起对哲学与医学发展关系之研究、医史分期之讨论引导对政治经济制度与医学发展关系之研究、医学人物之研究促进了如何正确评价其历史作用之讨论。在医史研究中、有关人物生平、学术成就及文献之研究、占着较大的比重。同时、还编辑有较大型的工具书：《中国医学百科全书·医学史》、《中医大辞典·医史文献》、《中医人物辞典》、《中医文献辞典》等、大型分卷本《中国医学通史》的编撰即將动手。医学史迎来了从未有过的欣慰局面。

三、医史教学与研究生培养：中国医学院校设教医学史的历史较早、但作为必修课是近三十年开始的。即创办于一九五六年的中医学院、现有二四所。西医学院设医学史课始于一九四六年、但至今只有十分之一的院校设有限课时的讲座。中国医学教育正在更多重视对学生的医史教学。为此。一九五六、一九八四先后办了师资骨干培训班。卫生部明令中国医史文献研究所为全国高等医药院校医史师资培训基地。一九七八年始、这个研究所招收了中国第一批医史硕士研究生。现在全国有十个院校招生。到一九八四年获得硕士学位的有近五十人、正在学习者尚有五十余人。

四、博物馆与纪念馆：中国建立医史博物馆始于一九三八年

即今之上海中医学院医史博物馆。后建者有陕西中医学院及设在

中国医史文献研究所之医史博物馆、这三个馆都有着较丰富的收藏、其珍品多者以上海为最。此外、一些省市还修复重建有扁鹊、张仲景、华伦、孙思邈、李时珍、兰茂、陈修园等纪念馆、收藏有关文物资料、研究交流学术、或以名医名中医院。

五、医学史科研动态：三十五年来、中国医史研究之道路虽然开不平坦、但仍取得了显著的成绩。如古代医学科学技术成就。考古发掘和理论研究等。展望未来、中国医史研究出现了如下一些倾向性转变。

①、以研究古代科技成就为主要方面正在向注重社会学诸因素同医学发展关系之研究、理论研究正在为更多的学者所重视：②、以研究古代为主的倾向、正在转向同近、现代并重的方面转化：③、中国各少数民族之传统医学史、如藏医史、蒙医史、维医史等、正在为越来越多的医学家、医史学家所重视：④、世界医学史之研究较过去也有发展、特别是东西方比较医史之研究已步入中国医史舞台：⑤、中国医史学界正在扩大自己同国外的科学史家、医学史家、学术团体、国际组织等、建立较广泛的接触和学术交流。

（中医研究院中国医史文献研究所所长）